

製油業界の CSR  
～CSV 経営の可能性を探る

B1EB1205 林 櫻

はじめに

近年、CSR(corporate social responsibility:企業の社会的責任)という概念の認知度が上がっている。企業はただ自社の利益を上げていけばよいのだ、という時代は終わりを告げ、社会の中の企業として自社の行動が社会に与える影響に対して責任を持たなければならないという考えが一般的になってきているのである。また企業は株主だけを重要視するのではなく、顧客、取引関係にある企業、従業員、また地域住民などその企業に関わる全てのステークホルダーに対する利益を実現することが求められている。

そして最近ではCSV(Creating Shared Value:共有価値の創造)という新たな経営概念も登場している。企業は自社の行動に対して責任を持つことだけに留まらず、社会に存在するさまざまな課題についての解決も期待されるようになってきているのである。今後企業にとって、CSRはますます重要な概念になってくるのは間違いないだろう。

私は就職活動を行う上で食品を取り扱う企業に興味を持ち、毎日の食生活に欠かすことのできないと言っても過言ではない「油」を取り扱う企業により興味を惹かれた。食事は我々が生きていく上で欠かすことができないものであるため、その食事に欠かすことのできない「油」は我々の日常生活に深く関わっているいわば「食のインフラ」的存在であるとも言える。私はそのような企業のCSRについて分析し、今後社会においてどのような役割を担い、また果たしていくことができるのか探って行きたいと考え、今回のテーマを選択した。本論文では第2章でCSR、CSVの理論について紹介し、第2章では製油業界について取り上げたいと思う。そして第3章では第1、第2章を元にケーススタディを行うことで、製油業界にこれから求められるであろう理想的なCSR、そしてCSVの形について述べていきたいと思う。

## 目次

### はじめに

#### 第1章 理論編

- 1、CSRとは
- 2、戦略的CSRの基本フレーム
- 3、CSV(Creating Shared Value)
  - 3-1、CSV(Creating Shared Value)とは
  - 3-2、何故CSVなのか

#### 第2章 製油業界について

- 1、食品業界の現状
- 2、製油業界について
  - 2-1、製油業界の歴史
  - 2-2、歴史的な事件
  - 2-3、製油業界の現状

#### 第3章 実践編

- 1、日進オイリオグループ「中鎖脂肪酸の可能性」
  - 1-1、企業紹介
  - 1-2、ケース紹介
  - 1-3、ケース分析
- 2、不二製油「サステナブル調達」
  - 2-1、企業紹介
  - 2-2、ケース紹介
  - 2-3、ケース分析
- 3、辻製油「バイオマス事業」
  - 3-1、企業紹介
  - 3-2、ケース紹介
  - 3-3、ケース分析

#### 第4章 まとめ・提言

- 1、まとめ
- 2、提言

### おわりに

参考資料 参考ホームページ

## 第1章 理論編

### 1、CSRとは

CSRはCorporate Social Responsibilityの略であり、企業の社会的責任と訳される。経済産業省の企業の社会的責任(CSR)を取り巻く現状について[2004:2]によると、CSRとは一般的に、法令遵守、消費者保護、環境保護、労働、人権尊重、地域貢献など純粋に財務的な活動以外の分野において、企業が持続的な発展を目的として行う自主的に取り組むと解されており、その具体的内容や政府の対応は各地域の歴史・文化・経済的背景によりことなるとされている。またCSRの「社会的」基準には、欧米の宗教観や社会的価値観が含まれており、地域や国、歴史や文化、宗教あるいは社会経済状況によって、その社会が求めるもの(価値観、倫理観、社会正義)は異なるとされている。経済産業省におけるCSRの定義は、「企業が社会や環境と共存し、持続可能な成長を図るため、その活動の影響について責任をとる企業行であり、企業を取り巻く様々なステークホルダーからの信頼を得るための企業のあり方を指す」とされている。これらの定義からも分かるように、CSR自体の定義は実に様々である。そうであっても、企業は金銭的な利益を得るため活動を行うにあたって、それによって社会・ステークホルダーなどに与えることになる影響に対して十分な責任を持ち、持続可能な成長を目指して努力すべきであるということは間違いないだろう。

CSRは欧州で誕生した概念であり、日本においてCSRの関心が高まってきたのは1970年代に入ってからである。1960年代から1970年代にかけては水俣病、新潟水俣病、四日市ぜんそく、イタイタイ病の四大公害裁判が社会問題となり、企業の責任が追求されていた時代である。川村(2008)によると、1970年代には企業の土地投棄や第一次石油ショックによる便乗値上げや買い占め・売り惜しみによる生活物資の高騰などによる半企業ムードが高まりから、CSRに関する意識もまた高まっていたという。その後企業の金余りの時代である1980年代には、企業のフィランソピー(社会的公益活動)やメセナ(芸術、文化支援活動)が活発化した。1990年代には世界規模の環境問題、経済格差問題が本格化し、日本においても企業の追うべき責任と担うべき役割に対して関心が高まってきたという。そして2000年代に入り、日本のCSRはまた新たなうねりを迎える。川村(2003)によると2003年はSRIファンドの登場やCSR組織の創設などから「CSR経営元年」と呼ばれるべき変化を迎え、CSRに関する意識が以前にもましてより高まってきた年代であったという。

このように、日本におけるCSRの位置づけは時代の移り変わりの中で様々な変化を遂げてきた。だが過去、日本におけるCSRの認識は、あくまでコンプライアンス(法令遵守)、社会貢献活動、環境保護活動などの、企業として社会から求められる最低限の責任を果たすといった程度に留まっていた。しかし2003年のCSR経営元年以降、経営戦略の中に直接CSR活動を組み込み、企業がCSR活動を通じて持続的に発展していくことを目指す新たな経営戦略が登場した。それが「戦略的CSRの基本フレーム」である。

### 2、戦略的CSRの基本フレーム

戦略的CSRの基本フレームとは、CSRを経営戦略の中に取り込み、CSRを経営戦略の一部とみなして企業が独自のCSRのあり方について考えるための枠組みのことである。株式会社野村総合研究所の伊吹英子氏は、CSRを経営戦略の一部として機能させるにあたり、企業が取り組むべきCSRの領域を「守りの倫理—攻めの倫理」、「事業内領域—事業外領域」の2軸で整理し、3つの領域を設定することによって自社のCSRの範囲を明確にしている。

伊吹[2005:46]によると、「守りの倫理」「攻めの倫理」はそれぞれ以下のような内容となる。

### 守りの倫理

守りの倫理とは、企業が社会に存在し企業活動を営むなかで、社会に負の影響を及ぼさないように予防する、もしくは、負の影響を及ぼしてしまったら、その影響をゼロに戻すための取り組みである。

### 攻めの倫理

攻めの倫理とは、企業が社会に存在し、企業活動を営むなかで、社会に正の影響をもたらすような取り組みである。

また、3領域は以下のような領域である。

#### A領域:企業倫理・社会責任領域

A領域は、企業が法令を遵守し、危機管理対策に万全を期すことでリスクを回避し、存続していくための活動領域であり、社会の根底に位置づける「守りの領域」である。

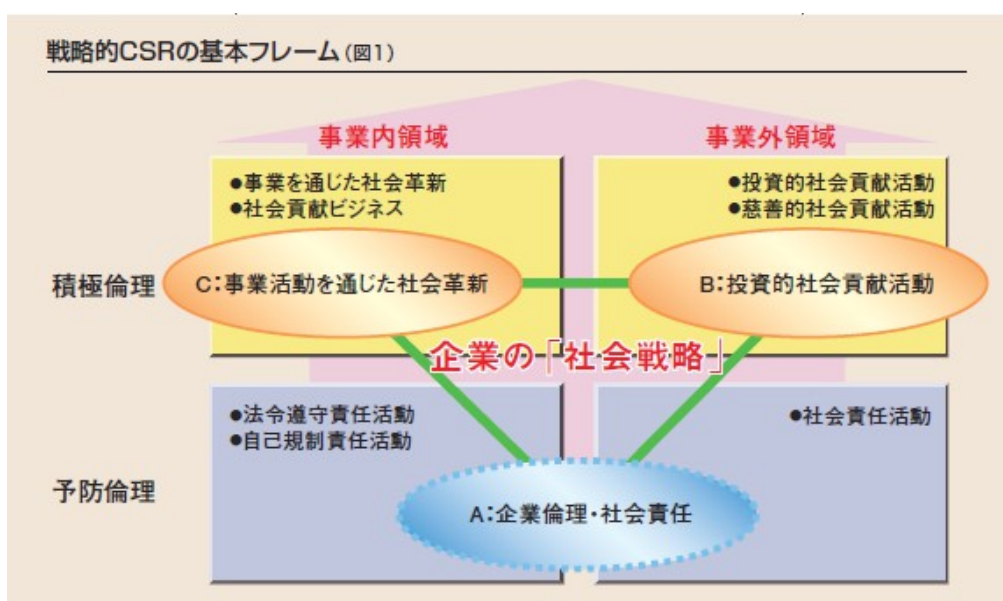
#### B領域:投資的社会貢献活動領域

B領域は、寄付や社会貢献活動など、企業が社会と良好な関係を維持していくために社会的効果と経営的効果の双方を両立させるための投資的な活動領域である。

#### C領域:事業活動を通じた社会確信領域

C領域は、企業が自身の行う事業活動そのものを通じて社会に対していい影響を及ぼし、社会価値を想像していく活動領域である。

A領域はいわば企業の一般的なリスクマネジメント的領域であり、B領域はいわゆる慈善活動全般の領域であると言える。そしてC領域であるが、これまでの一般的なCSR活動のイメージとは異なる。C領域は企業の強みを活かし、CSR活動を通じて社会を革新することと企業価値を高めることを両立できる点が特徴である。



戦略的CSRの基本フレームにより、単なるコンプライアンスや社会貢献活動に留まっていた各企業のCSR活動を、どの分野の活動がより優れているのか、またどの分野の活動がより劣っているのか、そしてどの分野の活動により力を注げばより企業価値が向上するのかなど、企業の戦略の一環として分析することが可能となった。すなわち、企業は自社のCSR活動を従来に比べてより明確に分析することができ、CSR活動を一つの経営戦略と捉えて行っていくことが可能となったのである。

### 3、CSV(Creating Shared Value)

#### 3-1、CSV(Creating Shared Value)とは

では次に、CSV(Creating Shared Value:共有価値の創造)について紹介したい。

CSVとは、2011年にマイケル・E・ポーターらにより提唱された概念であり、「企業の利益を目的とした活動と社会課題、環境課題の解決は両立する」という考えの下、企業価値と環境価値の両立を目的とした新たな経営フレームワークである。「事業活動によって社会価値を創造する」という点ではCSVは前頁で述べた戦略的CSRの基本フレームのC領域と似ている概念だが、CSVはより企業の本業に即した活動である。また活動の前提には実際に社会に存在する社会課題、環境課題の解決という目的意識が存在している。そして実際に金銭的利益を得るために行われるのがCSV活動である。「社会・環境問題の解決は、利益を生み出す機会である。企業価値と社会価値は両立する」(赤池・水上 2013)という一文からも分かるように、CSV活動は戦略的CSRの基本フレームのC領域をより発展させたものであり、実際の金銭的利益に結びつける活動であると言えるだろう。

CSVは、主に以下の3つのアプローチ方法からなる。

##### 第1のアプローチ:製品・サービスのCSV

第1のアプローチは、製品・サービスの提供によるCSVである。社会課題や環境課題を事業のターゲットとし、それを解決へと導く製品・サービスという企業側からの価値提供を行うことで社会課題、環境課題の解決という社会価値を生み出し、同時に利益創造を目的とするCSV活動である。

##### 第2のアプローチ:バリューチェーンのCSV

第2のアプローチは、バリューチェーンからなるCSVである。経済のグローバル化が進む現代社会においてバリューチェーンの見直し、効率化を図ることで環境負荷を軽減し、同時にコスト削減などによる企業競争力を高めることを目的としたCSV活動である。

##### 第3のアプローチ:競争基盤/クラスターのCSV

第3のアプローチは、事業を展開する地域の競争基盤/クラスター(競争基盤が特定地域に集中している状態)のCSVである。企業が事業を展開する地域における人材やサプライヤーなどのステークホルダー、地域環境などを強化することで競争基盤に価値を生み出し、事業展開における企業の競争力を高めることを目的としたCSV活動である。

#### 3-2、何故CSVなのか

では、なぜ今 CSV という新たな経営概念が求められているのだろうか。

経済のグローバル化が著しく進む現代において、企業は以前にも増して規模を巨大化し、力を付けてきている。一方これまで社会問題、環境問題解決の主体となってきた政府は世界経済の流れが自由主義化へと移りゆく中でその役割の及ぶ範囲を狭めざるを得なくなり、結果として政府の問題解決力は低下していくこととなった。このような状況において、企業が各々の持つ強みを活かして社会課題、環境課題の解決者として期待されるようになるのは当然の流れである。そして企業側も、インターネット、ソーシャルメディアの発達した現代社会において一般市民、NPO、NGO からの視線を軽視したまま活動を続けていくことはできない。

このような状況下においては、企業が CSR、CSV 活動を通じて社会に存在する様々な課題に対して受け身の姿勢ではなく能動的に働きかけ、解決に導いていくことが望ましいと言えるだろう。それは企業規模の大小に関わらない。企業は従来のような社会貢献活動の延長線上ではなく、CSR、CSV 活動を本業の中に組み込み、企業と社会とで win-win な経営を行うことで、これからの社会において「持続可能な発展」を遂げることができるのである。今後企業にとって「CSV 経営」というコンセプトは必要不可欠なものになってくるのである。

## 第2章 製油業界について

### 1、食品業界の現状

製油業界のCSRについて分析するにあたって、まず先に食品業界全体の現状について見ていきたいと思う。

食品業界は、平成25-26年度における業界規模18兆388億円、経常利益1兆62億円の国内で4番目の規模を誇る産業である。齋藤(2010)によると、食品産業の定義は広義で捉えるならば、食物を生産し、集める・加工するという形で付加価値を付け、最終的には消費者に販売するまでにかかわる一連の業種・業態をすべて食品産業に含めて考える。そのため食品業界は、広義の意味では農林水産業や小売・外食業も含まれることになる。

現在、食品業界の企業は主に国内向けの販売が主体となっている。しかし国内市場は既に飽和状態にあり、また日本の国内人口は創始高齢化の進行の影響を受けて縮小していくと予想されることから、大手食品企業は国外市場に目を向けて海外進出を積極的に推し進めようとする傾向にある。また企業規模や事業範囲の拡大を目的としたM&Aも進んでいる。このような状況下において企業は、今後生き残りのためにこれまでとは異なった戦略が求められると言えるだろう。

### 2、製油業界について

#### 2-1、製油業界の歴史

ここからは、製油業界について詳しく見て行きたいと思う。

まず初めに製油業界の歴史について簡単に触れる。製油業界日本における油の歴史は、701年の大宝律令が公布され、本格的に農業が開始された頃にまで遡ることができる。この頃、油の原料となる胡麻の栽培も本格的に開始されている。その後日本の搾油事業は、鎌倉時代から戦国時代にかけて現在の京都府を本拠地とした油の独占販売を許可された特権商人の存在である大山崎の油座の存在からも分かるように、菜種の産出地である関西を中心に発展してきた。そして明治時代に入り、日本にも欧米から機械技術の導入が始まると現代のような本格的な精製設備をそなえた製油工場が誕生した。「製油業界」としての発展が始まったのである。

#### 2-2、歴史的な事件

日本の製油業界における歴史的な事件として、カネミ油症事件が挙げられる。カネミ油症事件は1968年頃からカネミ倉庫により米ぬか油を使用して製造された食用油を食べた約1万4千人以上の人々がひどい吹き出物や内蔵疾患などさまざまな病状を訴え始め、症状は44年以上経過した現在でも続いており、「国内最大の食品公害」とも呼ばれている事件である。カネミ油症事件の原因はPCD(ポリ塩化ビフェニール)が加熱されることで変化したダイオキシン類、PCDF(ポリ塩化ジベンゾフラン)などが油の製造過程で混入したことである(PCDは、1972年以降生産中止になっている)。ダイオキシン類は自然界には存在しない物質であり、分解されることなくいつまでも蓄積される。そのため患者たちの症状は長引き、また被害が患者の子、孫世代にまで及ぶ次世代被害も問題となっている。当時、被害者は福岡県北九州市や長崎県五島市に多く見られた。当時はまだ陸路・海路などの交通網の整備が完全ではなく、五島市のような離島においては販売される物の中身がどのようなものなのかに関わらず、生活必需品はそれを使用せざるを得ないような状態であったため、特に被害が拡大したという。



カネミ油症事件のケースから、食に欠かすことのできない食用油はそれだけ社会に与える影響も大きく、果たすべき責任もまた大きいということが分かる。食品を扱う企業が自社の製品の安全管理を行うことは当然の義務ではあるが、食の様々なシーンに使用される食用油は良い影響・悪い影響共に広域なものになるという意識を忘れてはならないだろう。

## 2-3、製油業界の現状

では次に、製油業界の現状について見て行きたい。なお、今回本論文で取り上げる製油業界の「製油」は、食用油を製造するという意味での「製油」である。また食用油にはサラダ油、ごま油などの植物性のものとバター、ラードなどの動物性のものと大きく分けて2種類存在するが、今回は主に植物性の油を製造・販売している企業を取り上げたいと思う。

現在製油業界では、主に原料となる大豆、菜種、パームなどのほとんどを海外から輸入し、工場ですばい油を行うことで食用油を製造・販売している。また食用油だけでなく、油脂の原料から油分を絞り出した後の搾りかす(ミール)を配合飼料や有機肥料として販売したり、原料となる大豆や菜種などから油とはまた異なった製品を開発し、製造・販売を行っている企業もある。また製油業界には個人消費者向けの商品の製造・販売(BtoC)を行っている企業だけではなく、飲食店や企業などの法人顧客向けの商品の製造・販売(BtoB)を行っている企業も存在する。

また製油業界も食品業界全体の傾向と同じく、業界の再編が進んでいる。2004年に日進オイリオグループ株式会社、日進オイリオ株式会社、リノール油脂株式会社、ニッコー製油株式会社の4社の合併により日清オイリオグループ株式会社が誕生し、同じく2004年に株式会社ホーネンコーポレーション、味の素製油株式会社、吉原製油株式会社の3社が統合し株式会社J-オイルミルズが誕生するなど、昨今の食品企業同様に成熟した国内市場に対応し、また同時に国際競争力の強化を図っている。

## 第3章 実践編

ここからは実際の事例を紹介し、第2章で取り上げた「戦略的 CSR」、「CSV」の2つの理論を使用して分析していきたいと思う。特に、CSV、また今後 CSV へと変化する可能性を持つ活動を中心に取り上げようと思う。

### 1、日進オイリオグループ「中鎖脂肪酸の可能性」

#### 1-1、企業紹介

日進オイリオグループは1907年に創立され、2004年に日進オイリオグループ、日進オイリオ、リノール油脂、ニッコー製油の4社の合併により誕生した企業であり、業界売り上げ、家庭用食用油共にシェア1位を誇っている。業界最大手の企業であり、CSR活動もそれだけ規模の大きなものが予想される。

#### 1-2、ケース紹介

##### 「中鎖脂肪酸の可能性」

中鎖脂肪酸とは、ココナッツやパームフルーツに含まれる天然由来の成分である。油には様々な種類があり、長鎖、中鎖、短鎖に分類される。一般的な植物油は長鎖脂肪酸から成り立っているが中鎖脂肪酸はその約半分の脂肪酸であり、長鎖脂肪酸と比べ消化吸収されやすくエネルギーになりやすいという特徴がある。同社はそのような中鎖脂肪酸の機能に注目し、介護高齢者の低栄養を改善するために中鎖脂肪酸入りのプリンやビスケットを開発し、栄養補給や介護予防のための商品開発を行っている。

また近年中鎖脂肪酸は、ブドウ糖を吸収できなくなった若年性アルツハイマー脳の代替りの栄養源となりうる「ケトン体」が体内で作られられる量が一般的な長鎖脂肪酸を摂取した時と比べて多いことから、若年性アルツハイマー病や認知症対策になるのではないかと期待されている。同社ではこのような中鎖脂肪酸の可能性を更に探るため中央研究所での研究に加え、スペインの子会社に中鎖脂肪酸の専用生産設備を新設するなど、生産力の強化も図っている。

#### 1-3、ケース分析

この中鎖脂肪酸に関する取り組みを、まずは戦略的 CSR から分析する。今回のケースでは中鎖脂肪酸を利用した製品により、高齢者の低栄養を改善し、社会に良い影響を与えていると言えるため攻めの倫理に当てはまる。またこの取り組みは介護高齢者の低栄養を改善するだけでなく介護予防にも繋がり、同時に介護市場における同社ブランドの向上や売り上げの増加も見込むことができる。C領域のCSR活動は、「CSRの要素を他社の差別化や競争力強化、あるいは、さらなる企業価値向上のための戦略的な要素としてビジネスモデルに組み込んでいる」(伊吹:2005:72)とすることができるため、これはCSR活動の事業活動を通じた社会確信領域(C領域)であると言える。

次に、CSVの観点からの分析を行う。若年性アルツハイマーは働き盛りの世代で発症することが多く、家族に大きな経済的負担がかかる。同社はこれを社会課題ととらえ、解決へと動き出している。また同社はこれを一つの事業機会ととらえ、中鎖脂肪酸のグローバルリーディングカンパニーとなることを目指している(日清オイリオグループ CSR 報告書 2014:9)。しかし実際に同社の中鎖

脂肪酸による製品で実際に社会課題を解決した事例はまだ存在していない。したがって、この活動は現段階では1、製品・サービスのCSVとなる可能性を秘めているCSR活動であると言える。

## 2、不二製油「サステナブル調達」

### 2-1、企業紹介

不二製油は主にメーカー向けにチョコレート用油脂、製菓用油脂、乳化油脂、粉末油脂などを製造しているBtoB企業である。また「大豆の原点に戻り、新しい価値を創造し、人と地球の健康に大きく貢献したい」という理念の元「大豆ルネサンス」を掲げ、おいしさと機能性をもたせた新豆乳素材を開発するなど、広い範囲での活動を行っている。

### 2-2、ケース紹介

同社は原料調達のシーンにおけるCSR活動に力を入れている。同社は特定の地域や農園から購入することを前提とした「トレーサブルカカオ豆」を採用し、購入代金の一部が生産地でのインフラ整備や教育の向上に役立たせ、生産活動からの支援を行っている。また生産者がより良い生産方法を学び、労働条件を向上させるためのUTZ(ウツ)認証や、ステークホルダーの参加を通じて持続可能なパーム油の生産と利用を促進するためのRAPO認証を取得している。また2014年には西アフリカで産出されるシアから取れる植物性油脂であるシア脂のバリューチェーンに携わるステークホルダーの同盟であるThe Global Shea Alliance(GSA)に加盟している。



図2、UTZ認証マーク【出典:UTZ Certified HP】



図3、PSPO認証油マーク【出典:WWF HP】

### 2-3、ケース分析

今回のケースも同様にまずは戦略的CSRから分析する。まず今回のケースは持続可能な原料調達のために原料の生産者を保護し良い影響を与えていることから、攻めの倫理に当てはまる。またこの活動は「世界の人口増加に伴う食資源不足への不安から生産性の向上」(不二製油グループサステナビリティレポート2014:23)といった目的から原料の生産者を支援しており、将来的にも安定した原料調達を行うことを目指している。これは「社会的効果と経営的効果の双方を両立させる、投資的な活動戦略」(伊吹:2005:48)であることから、同社のこの活動は投資的社会貢献活動領域(B領域)であると言える。

次にCSVの観点からの分析を行う。一見するとこの活動は、3、競争基盤のCSVに当てはまる、また将来的にCSVへと成り得る活動である。しかし同社のこの活動はあくまで認証の取得や同盟への加盟などによって原料生産者を保護し、安定した原料調達を行うことに留まっている。シア脂の主な生産地である西アフリカは経済的に貧しい国が多く生産者の生活水準の低さが問題となっている。またパーム油の原材料であるパームの主な最産地であるインドネシアやマレーシアではパーム生産のためにアブラヤシの栽培が拡大し、それに比例して森林の破壊が増加しており、

NGO などからパーム産業に対する批判が起きている。このような社会課題に対してより積極的に働きかけ、生産地の生産力向上に繋げることができれば、CSV 経営として他社の一歩先を行くことができるだろう。

### 3、辻製油「バイオマス事業」

#### 3-1、企業紹介

辻製油は前述の日進オイリオ、不二製油とは異なり、従業員数 101 名のいわゆる中小企業である。同社は主にコーン、菜種を使用して食用油の生産を行っている。また日本で唯一、世界でも有数のレシチン(身体の正常な生理的機能の補助的役割を持つ脂質の一種)メーカーであり、純度の高い粉末レシチンを利用した事業規模の拡大を図っている。

#### 3-2、ケース紹介

同社の所在する三重県は、三重県公式 HP によると県土面積の 64%を森林が占めている。同社は地球温暖化防止、森林の環境保全、また地域の木材産業の活性化を目的として、松阪市の間伐が滞っている森林、また放置されている間伐材に目をつけ、それらをはじめとする製材端材、樹皮、残枚などを粉砕して木質チップに加工する「松坂木質バイオマス熱利用協同組合」を設立参画している。前述した木材を「ウッドピア木質バイオマス利用協同組合」が粉砕・チップ化し、その木質チップを燃やして作られた蒸気を同社の食用油製造工場で利用することで、平成 21 年には石油に換算すると年間 9,000KL 削減し、CO<sub>2</sub> の発生を 23,000 トン抑えることに成功している。



図 4、バイオマスボイラー工場【出典:辻製油 HP】

#### 3-3、ケース分析

まずは戦略的 CSR による分析を行う。同社のバイオマス事業は、製品の製造過程において排出される CO<sub>2</sub> という負の影響を減らす取り組みとして考えるならば、「企業が社会に存在し企業活動を営むなかで、(中略)負の影響を及ぼしてしまったら、その影響をゼロに戻すための取り組み」(伊吹:2005:46)に当てはまるため、守りの倫理の領域にも該当する。一方でこの活動は地域社会の森林保全、また林業の活性化も目的としており、正の影響をもたらしているという見方もできるため、攻めの倫理とも捉えることができる。そしてこの活動では事業内活動である製造過程で発生する環境負荷を減らしつつ、地域社会の活性化に役立っている。以上のことから、この活動は企業

倫理・社会責任領域(A 領域)をカバーしつつ、事業活動を通じた社会革新領域(C 領域)に該当する活動であると言える。

そして同社のこの活動であるが、不二製油の「サステナブル調達」同様、現段階では CSV には当てはまらない。理由に、バイオマス発電のコスト面の問題が挙げられる。バイオマス発電は発電と燃料の抽出それ自体にコストがかかることは言うまでもなく、発電の元となる原料(今回のケースでは木材)の運搬コストも考慮しなければならない。今回のケースでは木材の加工→発電→同社の工場というプロセスを経た電力利用であるため、通常の工場運営よりもコストが掛かることは間違いないだろう。CSV はあくまで社会・環境課題の解決と企業利益の両立を前提としているため、コスト面の問題が解決しなければ CSV 経営には成り得ないだろう。

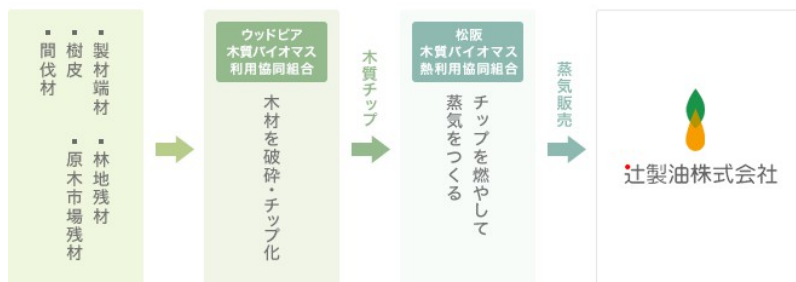


図5、バイオマス事業プロセス【出典: 辻製油 HP】

しかしバイオマス事業による環境への取り組みは、それ自体に企業のイメージアップ、ブランド価値向上をもたらすという側面がある。今後バイオマス発電のコスト面におけるデメリットが改善されれば、地域社会を活性化しつつ同社の価値を引き上げることができ、2、バリューチェーンの CSV になると言えるだろう。

## 第4章 まとめ・提言

### 1、まとめ

第3章の実践編では、代表的な3つの事例を取り上げた。製油業界のCSR活動を全体的に見ると、食品製造事業であることから工場を所持している企業がほとんどであることから、どの企業もCO2排出量に具体的な目標数値の設定や地域住民との関わりを重視している傾向にあった。また特に食品企業として当然の製品の安全・品質管理にはどの企業も力を入れており、フードディフェンス(食品防御)に対する熱心な取り組み(監視カメラの設置、工場内へのアクセス制限システムなど)が見受けられた。一方で製油業界は昔ながらの中・小規模の製油メーカーも依然多く、企業が最低限果たすべきCSR活動(環境方針の設定、ISO9001の登録など)のみを行っている企業も多かった。

食の安全や環境に対するCSR活動が活発な一方で、企業規模の大小に関わらずCSR活動が戦略的CSRのA領域に留まっている企業が多かった。製油事業に関連する事業において多様な製品を開発する企業も多数見受けられるが、本業の製油事業においては日進オイリオのケースのような新しい製品の開発はそれほど進んでいない印象を受けた。

### 2、提言

今回製油業界のCSRを分析して、特に本業(製品・サービス)におけるCSR、CSV活動に開拓の余地があると感じた。食用油の市場はある程度成熟しきっているが、例えばJ-オイルミルズの従来の製品よりも長く使うことができる食用油「長調得徳」のように、従来の製品に新しい機能を持たせた高機能製品にはまだ可能性が広がっているように思う。食用油は日常の食シーンのあらゆる場面で使用されることから、高機能製品が社会にもたらす価値はそれだけ大きく、また企業側にとっても価値向上に繋がると考えられる。

また辻製油のバイオマス事業のケースのように戦略的CSRのA領域に留まっている活動から更に一步踏み込んだ活動を行うことで、特に中小製油企業の地域におけるブランド価値向上を見込むことができるのではないかと感じた。食の安全に関する活動はどの企業も当然行うべき活動であり差がつきにくく、競争基盤/クラスターのCSVを見込むことができる活動を行うことで、地域に対する価値創造と企業価値の向上、また差別化を行うことができるのではないかと思う。

おわりに

今回本論文の作成を通して、製油業界の CSR 活動について理解を深めることができた。製油業界は大手企業を除くと CSR 報告書を発行している企業が少なく、本論文での CSR 活動のケース選択に若干恣意的な点があったように感じる。

また本論文の作成するにあたって、「何をもって CSV 経営とするのか」という問題と直面することになった。実際に目に見える利益を生み出すことができればそれがそのまま企業の「価値」となるのか、将来的に企業の利益に結びつくであろう活動は「価値」と考えることができるのか、など判断の難しい点が多かった。また一方で、企業が社会に生み出すことのできる価値に関しても同様に、目に見えない価値に関してどのように判断していくのかについて、まだまだ考察の余地があるように感じた。

成熟しつつある国内市場と、海外市場における熾烈な企業間競争の中で、日本の製油企業は今後生き残りをかけた更なる戦略が求められることになるだろう。そのような時だからこそ、社会課題の解決と企業の成長を両立させるという CSV 経営が意味を持つてくると考えられる。今後の製油業界の更なる成長と発展に期待したい。

## 参考資料・参考ホームページ

### 参考資料

赤池学・水上武彦(2013)『CSV 経営 社会的課題の解決と事業を両立する』NTT 出版  
伊吹英子(2005)『CSR 経営戦略 「社会的責任」で競争力を高める』東洋経済新報社  
齊藤訓之(2010)『図解雑学 食品業界のしくみ』ナツメ社  
谷本寛治(2006)『CSR 企業と社会を考える』NTT 出版  
日進オイリオ 日進オイリオグループ CSR 報告書 2014  
不二製油 不二製油グループ サステナビリティレポート 2014

### 参考ホームページ

川村雅彦(2003)『2003 年は「日本の CSR 経営元年」－CSR(企業の社会的責任)は認識から実践へー』<http://www.nli-research.co.jp/report/report/2003/07/li0307b.pdf>  
川村雅彦(2009)『日本における CSR の系統と現状』[http://www.nli-research.co.jp/report/kkyo/2008/2009\\_02/kkyo0902-2.pdf](http://www.nli-research.co.jp/report/kkyo/2008/2009_02/kkyo0902-2.pdf)  
“九州朝日放送 カネミ油症～KBC が追った 44 年の記録” <http://www.kbc.co.jp/tv/kanemi/>  
“経済産業省 CSR(企業の社会的責任)”  
[http://www.meti.go.jp/policy/economy/keiei\\_innovation/kigyokaikei/CSR/csr.html](http://www.meti.go.jp/policy/economy/keiei_innovation/kigyokaikei/CSR/csr.html)  
経済産業省(2004)『企業の社会的責任(CSR)を取り巻く現状について』  
[http://www.meti.go.jp/policy/economic\\_industrial/gather/downloadfiles/g40428a50j.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economic_industrial/gather/downloadfiles/g40428a50j.pdf)  
“植物のチカラ 日進オイリオ” <http://www.nisshin-oillio.com/>  
“辻製油株式会社” <http://www.tsuji-seiyu.co.jp/>  
“バイオマス発電.com バイオマス発電のデメリット・問題点” <http://xn--eckm9b3e4c1047cht1b.com/about/demerits.html>  
“わたしたちの五島市 (1)カネミ油症(ゆしょう)事件のおこり”  
[http://www3.city.goto.nagasaki.jp/gotowebbook/3/3\\_5\\_1.html](http://www3.city.goto.nagasaki.jp/gotowebbook/3/3_5_1.html)  
油脂と大豆たん白 | 不二製油 <http://www.fujioil.co.jp/>  
“UTZ Certified” <https://www.utzcertified.org/>  
“WWF PSPO について” <http://www.wwf.or.jp/activities/resource/cat1305/rsports/>